

男子ハンドボール日本ユース代表および日本代表における

攻撃の特徴

－ ノルウェーとスロヴェニアとの比較から－

平本 恵介 (筑波大学)

1. 目的

ハンドボールでは2年ごとに世界選手権が開催される。2017年のユース代表では、日本(8位)、スロヴェニア(13位)、ノルウェー(17位)の順だが、フル代表では、ノルウェー(2位)、スロヴェニア(3位)、日本(22位)の順であり、日本はフル代表で急激に順位が落ちていた。そこで本研究では、日本、ノルウェー、スロヴェニアの攻撃様相とシュートプレーをユース代表とフル代表で比較し、日本のそれぞれの年代の特徴を明らかにすること、日本がユース代表からフル代表にかけて重点的に強化すべき内容を提言することを目的とした。

2. 研究方法

- 1) 分析対象: 両大会における日本、ノルウェー、スロヴェニアが戦った全ての試合
- 2) 分析方法: ①攻撃様相に関する分析②シュートプレーに関する分析、の2つの観点に沿って記述的ゲームパフォーマンス分析を行った。

3. 結果と考察

1) 攻撃様相に関する分析

全体のシュート成功率は、ユース代表では有意差は認められなかったが、フル代表では有意に低いことが認められた(54.4%)。速攻のシュート成功率は、ユース代表フル代表ともに有意差は認められなかったが、遅攻のシュート成功率は、フル代表では有意に低いことが認められた(49.3%)。これらのことから、フル代表はシュート成功率の低さ、特に遅攻のシュート成功率の低さが課題であると考えられる。

2) シュートプレーに関する分析

サイドシュートの成功率は、ユース代表では有意差は認められなかったが、フル代表では有意に低いことが認められた(55.3%)。このことから、フ

ル代表はサイドシュートの成功率の低さが課題であると考えられる。

ポストシュートの成功率は、ユース代表では有意に高いことが認められた(88.4%)が、フル代表では有意差は認められなかった。生起率は、ユース代表では有意差は認められなかったが、フル代表では有意に低いことが認められた(7.0%)。ディスタンスシュートの生起率は、ユース代表フル代表ともに有意に高いことが認められた(ユース代表57.7%、フル代表56.1%)。ゴールから近いエリアからのシュートであるポストシュートは成功率が高く、ゴールから遠いエリアからのシュートであるディスタンスシュートは成功率が低い。よって、フル代表において、ポストシュートの生起率が有意に低く、ディスタンスシュートの生起率が有意に高いことは全体のシュート成功率を下げる原因の一つであると考えられる。

4. 結論

ユース代表は、ポストシュートの成功率が有意に高い、ディスタンスシュートの生起率が有意に高い特徴がある。フル代表は、遅攻のシュート成功率が有意に低い、サイドシュートの成功率が有意に低い、ポストシュートの生起率が有意に低い、ディスタンスシュートの生起率が有意に高い特徴がある。

日本がユース代表からフル代表にかけて重点的に強化すべき内容は、サイドシュートの技能向上と、ポストシュートを増やす戦術の準備である。

5. 主な参考文献

- 1) 和田拓, ハンドボール日本代表チームにおける攻撃の現状と課題-シュートプレーに着目して-, 平成24年度筑波大学大学院人間総合科学研究科体育学専攻修士論文, 2013年。